移動動物園を迎えて

野辺繁子

子どもたちが待ちに待った移動動物園が訪問してくれる日、あいにくこの日は前日とはうって変わった雨降りで、がっかりしてしまった。園庭で遊ぶ計画を変更して保育室を「モルモットとうさぎ」「はつかねずみ・砂ねずみ・チャボの親子」「あひる・がちょう・かも」の三つにわけ、遊戯室のステージはチンパンジーのサッちゃん、フロアーの広い所はやぎさん、と入口にそれぞれ紙に書いてはった。

十時すぎに、ライトバンの助手席にベビー毛布にくるまれてサッちゃんが着いた。子どもたちは大喜びで全員テラスへ出て迎えた、寒いのでサッちゃんは機嫌がわるく、ストーブのそばで充分暖まってから、子どもたちと握手をしたりピアノを叩いたり、ミルクをスプーンで上手にのんだりした。始めはびつくりして手も出せなかった子どもが、だんだん馴れて、そっとさわってはうれしくなり「先生、おばあさんの手みたい」「手がちゃんと曲ったよ」「まっ黒い手で、よごれているのかな」など目をかがやかして報告にきた。

おひるになるとサッちゃんは、いすの上にきちんとひざを揃えてすわり、子どもたちといっしょにお弁当を食べた。飼育係の小父さんの手製の食事がお皿の上にきれいに並んだ。食パンの蜂蜜つき、レタス、バナナ、みかん、にんじんを「いただきます」と頭をさげてから上手にフォークにさしてたべるのをみて、子どもたちは驚いて声も出なかった。食事のおそい子、こぼす子も行儀よく、早く、残さず食べ終わった。先生が言葉で注意するよりも効果があった。バナナを一本余分に持ってきて「サッちゃんにあげて」と小さな声でさし出した子どもも何人かあった。

やぎも抱きやすい大きさで、子どもたちは一生懸命に教えられた通り、落とさないように抱いていた。子やぎが乳をのんでいるのに人気が集まった。やぎに餌の与え方もわかり、子どもたちはやぎとかけっこもできた。「ころころうんちをした」といっては喜び「かけっこで勝てた」といっては得意になっていた。

始めはただ眺めていた子も、小さなねずみの赤ちゃんを手にのせてもらって緊張の中にもうれしそうに顔をほころばせていた。

あひるの部屋では子どもたちが手をつないで円周にそって歩くと、中のあひるも中心に集まって、子どもたちのきざんだ餌をたべたりした。部屋を出る時に、あひるのあるき方をしている子どもも何人かみかけられた。

モルモットとうさぎは、雨のために砂場が使えず積木でつくった遊び場で遊んだ。「かくれんぼが好きだ」「両方ともたべ方が同じね」という声も子どもたちの口から聞こえた。

動物園でおりの中の動物を眺めたり、子ども動物園で動物をさわったりするより、自分たちの園に迎えたかわいいお客様という気やすさからか、いっしょに遊んだり餌を与えたりしている生活の中に、子どもたちは動物の習性や特徴に気づき、やがては美しい愛情も育っていくようである。スナップ写真にうつっている子どもたちの表情からも、都会の幼稚園の子どもたちに必要なものは何だろうかと今さらのように考えさせられた。卒業式の折、父兄から、幼稚園でなくては味わえないよい経験だったと感謝された。

動物と遊んだ保育室は、五歳児と先生で楽しそうに掃除をすませ満足のようすだった、子どもたちからの発案だったとあとで知ったが、小さな子どもたちにも働くことの喜びが遊びの中から育っていくように思われた。こわがることを心配していたが、そうした子どもがほとんどみられなかったのは、日常動物の世話に馴れていたこと、先生方自身も楽しんで動物に接し、幼児が動物を迎えて楽しく遊ぼうとする期待をもつよう、前もって準備していたことなどが考えられる。

動物たちは、きた時と同じようにライトバンにのせられ、気候のよい秋に再びくることを子どもたちと約束して、一時半ころ帰っていった。

（浦和市木の実幼稚園）